

広がるトリ科学



国際鳥類内分泌学シンポジウムに向けて

食欲もニワトリそれぞれ

動物は食物を摂取しなければ生きていくことができず、そのために本能の一つに食欲が組み込まれています。野生の鳥類の食性は、多種・多様ですが、その中には動物食もしくは種子・果実食が多いことが知られています。



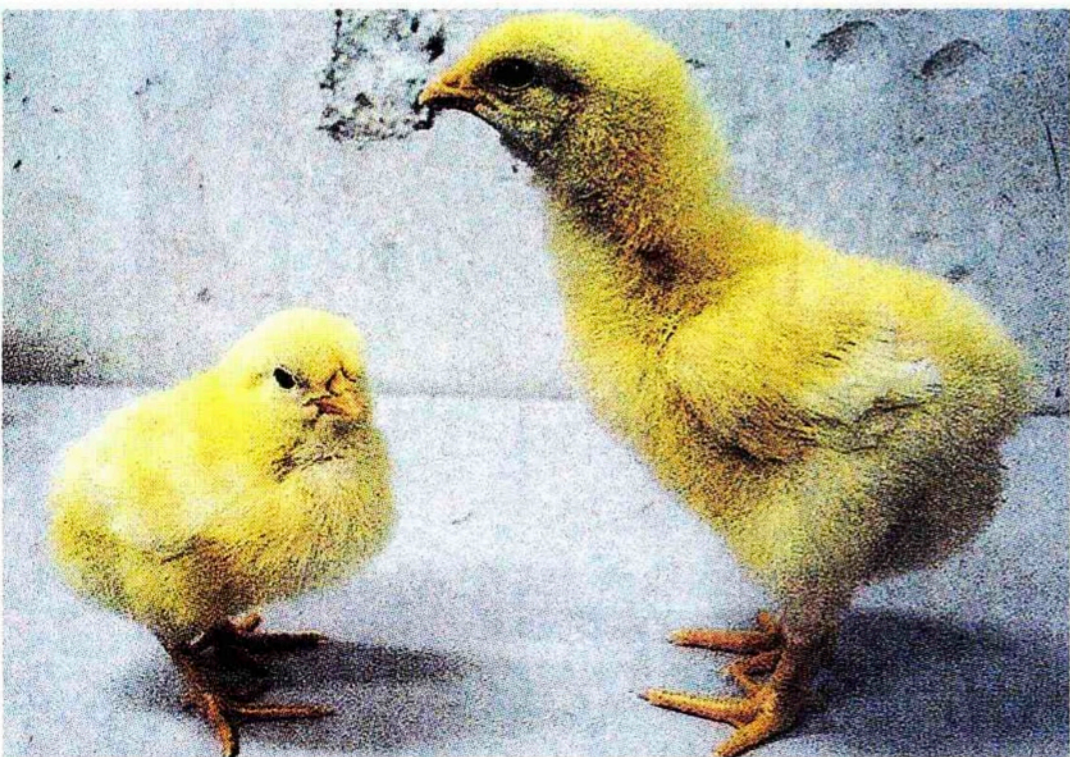
古瀬充宏教授

それらの鳥類が摂食できる食物は季節などの影響を大きく受けることになり、食欲は鋭敏に機能しなければなりません。一方、家畜化されたニワトリは常に飼料を供給されていますが、食欲の調節は見事な仕組みの中で維持されています。

しかし、赤色野鶏から育種改良されたニワトリは、卵用種、肉用種(ブロイラー)あるいは愛玩用などに選抜されました。その結果、単にニワトリという表現のみで食欲の仕組みを述べようとすると大

卵用種と肉用種で違い

九州大学大学院農学研究院教授 古瀬充宏氏



きな誤解を生む場合があります。

ここでは卵用種と肉用種の違いの一部を述べます。卵用種は産卵個数の増加を目的に改良されたもので、体躯(たいく)はそれほど大きくありません。一方、肉用種は成長の早いものを育種選抜してきました。

表現を変えると、摂食量が多い個体を肉用種として選び出したことになり、肉用種と卵用種の間には

摂食調節に関して大子の発現が少ない可能性を示唆します。また、急激なストレスは著しい摂食量の低下を導きますが、そのストレス反応の起点となる副腎皮質刺激ホルモン(GLPI)やα-メラニン細胞刺激ホルモン(α-MSH)種では異なります。C RFのストレス反応に対する効果は卵用種では強く表れますが、肉用種では効が悪いです。しかし、GLPIやα-MSHが結合する部位(受容体)に、Hが結合しにくくなる物質を投与すると、卵用種では摂食量の亢進(こうしん)が認められますが、肉用種では変化は起こりませ

◇ 寄稿文、国際鳥類内分泌学シンポジウムに関する質問、問い合わせは、ISAE2012 岐阜・企画運営委員の川島光夫・岐阜大学応用生物科学部教授、電話058(293)2870。メールアドレス tsukawasima@gif-u.ac.jp

